

鳥根県立大学出雲キャンパス  
紀要 第7巻, 119-126, 2012

# がん領域における ピアサポートの生涯学習的視点

伊藤 奈美・平野 文子

## 概 要

がん領域におけるピアサポートを、ピアサポート、がんピアサポート研究および生涯学習の観点から考察し、がんピアサポートの可能性と課題を検討した。がんピアサポートは、学びの相互性や循環、がん体験の意味づけ、自己受容につながるなどから、生涯学習と位置づけることができると考えられる。がんという共通課題を持つ人々による課題克服への取り組みは、共同社会の基盤形成にもつながる。がんピアサポートが新しい社会資源として十分に認知されていない現況から、社会全体の取り組むべき学習課題とみなすことに一定の意義が見いだせる。

キーワード：がん、ピアサポート、生涯学習、体験、相互性

## I. はじめに

統計によると、日本人の約2人に1人ががんに罹患している（がんの統計11, 2011）。1981年より脳血管障害を越えて死因の第1位となり、2010年には年間約35万人が亡くなっている（平成22年人口動態調査, 2011）。一方で、がん生存者（がんと診断され生存している人）も年々増加し、1999年には298万人だったがん生存者も2015年には530万人と推計されている（山口, 2003）。がんはもはや「不治の病」ではなく、慢性疾患の1つであり、誰もが罹患する可能性のある病気と捉えた方がよい。統計的にはそうであるが、患者にとってがんは依然深刻な病気であることに変わりはない。がん患者に「これまでどのようなことを悩んだか」を尋ねた調査（自由記述, 複数回答）では、①痛み・副作用後遺症などの身体的苦痛、落ち込みや不安や恐怖などの精神的なこと、②夫婦間、子どもとの関係などの家庭・家族のこと、③仕事、地位、人間関係などの社会とのかかわり、④医師や看護師とのかかわり、⑤収入、治療費、将来への蓄えなどの経済的なこと、⑥これからの

生き方、生きる意味などに関することなどを挙げており（土田, 2011）、長期に渡って療養を続ける中で、多くのがん患者は多様で複雑な悩みを抱えている。

ここで様々な悩みや不安を抱えるがん患者が、いかに問題を乗り越えていくかが課題になってくる。2012年見直された、国の「がん対策推進計画」（厚生労働省, 2012）の中では、「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」や「がんに関する相談支援と情報提供」が記述されている。その中でもがん患者の悩みや不安を軽減するために、「がん患者・経験者との協働を進め、ピアサポートをさらに充実するように努める」ことが盛り込まれた。近年、がん領域におけるピアサポート（以後、がんピアサポートとする）は、これからのがん相談支援として期待されている。これまでの医療従事者による支援に加えて、がんの当事者同士の相談ががん患者への支援につながっていくものであり、全国的にも広がりを見せつつある取り組みである。

しかし、福祉・保健・医療・教育の領域でピアサポートの導入、実践は行われている（大石, 2007）ものの、がんピアサポートそのものに関

する研究はほとんどなく、緒についたばかりである。がんピアサポートの推進のためには社会の理解が必要不可欠であるが、同時に相談者の支援を可能とするがんピアサポーター養成が必要となる。がんピアサポートとは自分のがん体験を生かした支援であるが、他者（相談者）との関わりから自分の過去に向き合い、新たな自己形成につなぐ機会となる。相談者、ピアサポーターとの相互性から、社会で生きる意味を見いだすことができる可能性がある。相談者への支援が第一義的ではあるが、相談者、ピアサポーターの相互作用により、共に学び合い、支え合う可能性を含んでいる。以上の点からがんピアサポートは、がん患者の生涯学習そのものであり、学習成果を社会で生かす重要な取り組みである。

本稿では、これまでのピアサポート、がんピアサポート研究および生涯学習の観点から、創成期であるがんピアサポートの可能性と課題について考察することを目的とする。

## Ⅱ. 研究方法

医学中央雑誌刊行会の文献検索システム「医中誌 WEB」、国立情報学研究所文献検索システム「CiNii」より、キーワードに「がんピアサポート」「ピアサポート」「生涯学習」について検索した。がんピアサポートを生涯学習の視点から、がんピアサポートの課題および可能性について検討する。

## Ⅲ. 生涯学習について

### 1. 定義・理念

2006年12月、教育基本法が改定され、第三条に初めて生涯学習の理念が次のように謳われた。「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」（文部科学省、教育基本法、1996）。生涯学習について赤尾は、「人間が生まれてから死ぬまでの間、絶え間なく学び続けることの

総体を指し、学校教育のように意図的な教育・学習に限定されず、自己形成に関わる全ての学習が生涯学習を構成」するものと述べている（赤尾、2006）。その背景には、少子高齢化、高度情報化、科学技術の刷新や経済構造の急激な変化、長引く不況などの社会変化への対応がある。もはや学校で学んだだけでは、目まぐるしく変化する社会に対応することはできないため、人は生涯学び続けていく必要があるといえる。

文部科学省は、報告書「長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ『幸齢社会』～」の中で、「生涯学習とは、自己の充実や向上のために、人生の各段階での課題や必要に応じて、あらゆる場所、時間、方法により学習者が自発的に行う自由で広範な学習を意味している。」「社会参画や地域貢献活動を円滑に実施していくためには、人間関係の形成に関する知識や活動に関する知識など、習得の意図を持って行う学習活動が必要となる場合もある。（中略）社会参画や地域貢献活動を通じて意図せずに学ぶことも考えられる。すなわち、社会参画や地域貢献活動そのものも生涯学習に含まれる。」と生涯学習について示した（文部科学省 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会、2012）。生涯学習イコール「高齢者の生きがいづくり」との認識も一部あるが、青少年期、成人期、老年期など、発達段階に応じた課題があり、生涯各期に対応するために生涯学習政策があると考えたほうがよい。生涯学習の活動には、まちづくりやボランティア活動も含まれ、意図的、無意図的に関わらず、あらゆる場面で生涯学習となる可能性が存在している。

### 2. 成人の生涯学習論

成人期の生涯学習論を代表するものに、Knowlesの成人教育論がある（三輪、2006）。Knowlesは成人教育について、「最も広義の意味では、このことばは成人学習のプロセスをさしている。（中略）新しい知識、理解、技能、態度、関心、価値観を得られるようなほとんどすべての経験を含むことになる。」と述べている。アンドラゴジー（成人の学習を援助する技術と科学）とペタゴジー（子どもに教える技術

と科学)とを区別し、「①自己概念は、依存的なパーソナリティのものから、自己決定的な人間のものになっていく。②人は経験をますます蓄積するようになるが、これが学習へのきわめて豊かな資源になっていく。③学習者のレジリエンス(準備状態)は、ますます社会的役割の発達課題に向けられていく。そして、④時間的見通しは、知識のあとになってからの応用というものから応用の即時性へと変化していく。」と成人学習者の特性を挙げている(Knowles, 1980)。成人教育は、これまでの経験を学習資源とし自己決定が尊重される、学習者の経験や主体性を重視した学習といえる。

### 3. 生涯学習における経験の意味

では単に「経験した」ことが、学習として成り立つかどうかという疑問が生じる。以下に学習と意味について論じられているものを列記する。

Mezirow は、「学習とは、私たちがすでに生成した意味を、現在経験していることについて私たちが考え、行為し、感じる仕方を導くために用いることを意味する。意味づけることとは、自分の経験の意味を理解したり、経験にまとまりを与える行為である。」と述べている(Mezirow, 1991)。赤尾は「生涯学習とは、ある人が人生を生きていく過程でさまざまな『意味』を獲得し構築していく過程であるといっよい。(中略)人間は日常生活の中で常に自分の学習経験を『意味づける』行為をしながら生きている。」と、経験の意味づけについて示している(赤尾, 2006)。Knowles は、「人間は、成長・発達するにつれて、経験の蓄えを蓄積するようになるが、これは、自分自身および他者にとってのいっそう豊かな学習資源となるのである。さらに、人びとは、受動的に受け取った学習よりも、経験から得た学習によりいっそうの意味を付与する。」とし(Knowles, 1980)、経験が自分自身だけではなく他者の学習資源となり、経験にこそ意味があるという立場をとる。

以上のことから、経験を学習として成立させる一条件として経験の意味づけがあり、意味づけされた経験がさらなる学習の継続へと相乗効果をもたらすと考えられる。

## IV. がん領域におけるピアサポート

### 1. がんピアサポートとは

大野はがんピアサポートの定義を、「がん体験を持つ患者やその家族が体験からの学びを生かし、新たになんにかかった患者やその家族の支援をすることあり、それに携わる人のことをピアサポーターという」としている(大野, 2011c, 2010)。がん体験を媒介とした、当事者視点での支え合いであるため、専門家からの非専門家への支援のような上下関係でなく、両者関係は対等である(大野, 2012, 2010)。同じ経験をもつ患者の話聞くことで、療養生活を過ごすための情報や知恵を得ることができる。患者や家族にとっては、貴重な情報源であり、サポート源にもなる(高山, 2010)。体験者による相談窓口、患者サロンを合わせてピアサポートと称することもある(土田, 2011)。

以上のようにがんピアサポートは、ピアサポーターががん患者やその家族に対して行なう支援であり、がんを体験した当事者同士の支え合いのシステムである。狭義では、がん体験者が行なう相談窓口やがん体験者ががん患者の話聴く機会というように捉えられている。

### 2. 教育分野におけるピアサポート

ピアサポートについての研究や報告は教育分野では多数行われている。非行や不登校、いじめ、学校不適應といった教育問題に対する支援に、ピアサポートが「仲間支援」という位置づけで実践されてきた経緯がある。西山によると、「教育・福祉などの各分野で取り入れられ、いずれの分野でも、その領域の専門的立場から非専門的立場へのアドバイスではなく、援助者と非援助者の関係はあくまでも同等の立場をとる(西山, 2009)。教育研究の中でピアサポートの定義は、「支援を受ける側と、年齢や社会的な条件が似通っている者(ピアサポーター)による、社会的支援(ソーシャルサポート)(戸田, 2001)」「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称(西山他, 2002)」などがある。大学におけるピアサポートについては、学生による学生のための援助である(加賀美, 2010)。

ピアサポートを機能によって整理して、主に①相談活動、②葛藤調停（対立解消）、③仲間づくり、④アシスタント、⑤学習支援、⑥指導・助言、⑦グループリーダーの7つの形態にまとめられている（西山，2009）。

このようにがんピアサポートと教育分野のピアサポートでは、「同等の立場での支え合い」という対人関係を利用した支援という点で概ね同じように捉えられている。しかし、ピアサポートの条件に共通体験（例えばがん体験など）が要件であることや相談活動が中心である点などでは、教育分野とのピアサポートとに差異がみられる。

### 3. がん領域におけるピアサポートの必要性

がんピアサポートは、がん患者の要求からスタートしたといえる。2008年にがんサバイバーを対象にがん患者への心のケア・サポートに関する意識調査が実施された。入院ないし外来通院中に患者同士でサポートし合った者は46.8%を占め、そのうち84.2%が精神的に助けられたとしている（松下他，2010）。過去5年間にがんと診断された患者が経験した社会的問題の調査では、「同じような体験をした人と話す機会がないこと」について、31.8%の人が「非常に困った」「かなり困った」と回答している（久山，2010）。がん政策情報センターが調査した「どのようなサポートがあればよかったか」について（複数回答）は、「ピア（仲間）による医療やサービスについての情報提供サービス」を39.6%、「ピア（仲間）サポートによる社会面に関するサポート」を15.2%の人が上げている（がん政策情報センター第1期プロジェクトスタッフ，2011）。以上のことより、がん患者が同じ体験をした人と話したい、ピアサポートを受けたいと希望していることがわかる。大野はピアサポートの目的について、第一義的には治療全般に関する情報提供であるが、がんを体験した者同士の語らいのほうが重要であると指摘する（大野，2011c）。

これらのことにより、がん患者が同じ体験をした人と話すことによって心の平静を取り戻したい、共感できる相手と出会うことで不安から解放されたいと考えていることがうかがえる。

高度情報社会といわれる現代であるが、インターネットや書籍などから得られる情報や医療機関などの支援だけでは悩みや不安は解消されず、むしろそれらを増大させているケースもある。そこに足りないのは「共感」であり、だからこそがん患者の悩みや不安を和らげるには、同じ体験をしたがん患者である、がんピアサポーターの力に期待されているのではないだろうか。

### 4. がんピアサポートの課題

がんピアサポーターの中には、「がん体験者というだけではがんピアサポートはできない」という意見もあり（大野，2010）、がんピアサポートががん体験の条件以外にも、がんに関する知識やコミュニケーションスキル、共感的に寄り添う姿勢なども必要であることを意味している。

戸田は、「ピアサポーターは、通常あらかじめトレーニングを受け、必要に応じてスーパービジョンのもとで支援を行なう。したがってそのようなトレーニング等の準備やバックアップ体制のない、日常の仲間関係の中で行なわれている社会的支援を、ピアサポートと呼ぶことはない。」と述べている（戸田，2001）。学校現場では構成員に流動性のあるピアサポートを継続させるために、教員やそれを取りまとめるコーディネーターが絶えず指導するなどの努力が続けられている（加賀美，2010）。

一方がんピアサポーターについては、ピアサポーター養成のためのカリキュラムが不十分であり標準化されていない、個々の団体が独自に養成し、サポーターの質、活動状況もさまざまに社会的な評価されているとはいえない、などの課題がある（大野，2010，2011c；桜井他，2008）。がんピアサポートそのものも、目的や内容があいまいであり、質の評価、がん患者の関与による効果判定がなされていないなどの問題が指摘されている（桜井他，2008）。

がんピアサポートは、支え合う関係である。「支え合う」とはお互いに認め合うことであり、その結果、共感や安心感をもたらす、自己受容へとつながる。誰かの役に立つことは、自己効力感をもたらす、更なるサポートへと発展して

いく。相談者とよりよい関係を構築し、がんピアサポートを円滑に進めるためには、がんピアサポーターには専門家ほどではないにしろ、がんに対する正しい知識やコミュニケーションスキルなど、一定の知識や技術も求められる。それと同時にがんピアサポートのマネジメントやがんピアサポーターの養成システムなど、がんピアサポートを支える仕組みが必要となる。

## V. 考 察

生涯学習とは豊かさの追求と平和的にとらわれる向きもあるが、病気や生死に関わる学習もその範疇である。がん患者が自分の病気について正確な情報を得たいというのは、当事者として自然に発現する感情であり、がんに関する知識への欲求を強く感じることも当然である。生涯学習は意図しない偶発的学習も含まれるため、がん体験そのものも結果的に学習として認識できる。がんの体験そのものから導かれる学習と、その延長線上にあるがんに関する知識への欲求を総じて生涯学習と捉えることができる。

すべてのがん患者に当てはまるとは言い切れないが、がん体験を通して人生に何らかの意味づけや新しい価値を生み出すことも予測される。がん体験の意味づけに関して、「ベネフィット・ファインディング (benefit - finding)」という考え方がある。ベネフィット・ファインディングとは、「以前のポジティブな人生のイメージを維持するためにがんの意味づけをしようとする努力のこと」である。Jimらは、「ベネフィット・ファインディングによって、かすかな希望が強められ、苦悩に意味を見出し、がんによってもたらされたダメージに対処していけると思えるのであれば、そこには価値がある」と述べている (Jim, H. 他, 2010)。がん患者にとってがん体験の意味づけは、その後の人生に大きな影響を及ぼすと考えられる。大野はピアサポートを、「今までの自己体験の整理を行い新たな気づきを得る行為」としている (大野, 2010)。したがって、がんピアサポートはがん体験の意味づけを促進させる機会としても期待できる。

また、「《がんの多重的苦悩への寄り添い》が、自分のがんと向き合う契機となり《ピアサポートへの継承》へとつながった。《ピアサポートの継承》は、(中略)がん患者からサポーターへと新たなサポーターの創出と、(中略)ピアサポーター自身の成長が内包されていた。」(大野, 2011a) とがんピアサポートの相互性や循環についても述べている。がんピアサポートは、がんの体験の共有や共感していく行為であり、相互関係によって成立する。がん体験を語ることは自分を客観視するということであり、がんである(であった)自分を受容したことにつながるのではないだろうか。つまりがん体験を語ることは、がん体験の意味づけによる人間的成長に結びつく行為であると考えられる。がんピアサポートは相談者との相互関係であることから、自己受容は相手を受け入れるための前提となるだろう。これらのことにより、相談者はがんに関する情報や知識の提供を受け、一方がんピアサポーターは相談者との関わりから、自分自身の学びを高める機会となる。そして、相談者の中から新たなサポーターが生まれ、学びの循環へとつながっていくと考えられる。

しかしがんピアサポートは、全国的に見ても創成期の取り組みであるため、認知度は決して高くない。加えて現在、がんピアサポーター養成の全国的に共通したカリキュラムの構築が急がれている状況である。がんと診断された直後からがんピアサポートを受けることが、がん患者への支援には有用であり、そのためには新たな社会資源の一つとしてがんピアサポートが一般に理解されていくことが求められる。医療技術の進展は日進月歩であり、がんを取り巻く状況も日々変化し続けているため、不断の学習なくしては有効な対応ができない。がん患者だけでなく、がんは誰でも罹患する身近な問題であり、予防という観点からも社会全体で取り組むべき課題でもある。その足がかりとしてがんピアサポートの理解を広めていく必要がある。がん患者、家族、医療機関、行政、企業、地域など幅広く社会全体で取り組むべき学習課題として、がんピアサポートを位置づける努力し続けていくことが重要である。

がん患者の社会参加・社会復帰という点につ

いても、がんピアサポートの可能性は大きい。がん体験者は、一般的に人や社会からの疎外感に苛まれ、距離を感じてしまいがちになる。がんピアサポートは、人や社会との接点をもたらし、社会の中で生きる意味を与え、自己効力感を高めていく可能性がある。

近年の日本におけるがんの罹患者数の増加や、就業問題を含むがん患者への社会の理解不足・体制の不備など、がん患者を取り巻く状況は厳しさを増している。がんピアサポートは、一人では乗り切れない状況ががんピアサポートによって打開しようとする、新しい課題解決法である。血縁や地縁を基盤とする社会が揺らいできており、共助の精神の再構築が求められるなど社会状況は芳しいものではないが、だからこそ共通の課題を持つ人々が支え合いながら同一の課題に向き合うことは、新しい共生社会づくりの礎となる。これは今期策定された「がん対策基本計画」の中で国が求めている「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」(厚生労働省, 2012) に向かうことである。がんを切り口とした社会への働きかけは、社会ががんに関心を寄せることやがん支援への充実へとつながる可能性がある。2人に1人ががんになる時代、これからの生涯学習の一環としてがんに対する理解を深めていくことも社会に求められていると考えられる。

## VI. おわりに

今回、がんピアサポートを生涯学習の視点から考察した。がんピアサポートは双方向の支え合いであることから、学びの相互性や循環、がん体験の意味づけ、自己受容につながる可能性があることが導き出された。

一方課題も山積しており、新しい社会資源としてがんピアサポートが地域社会で認識されていないことも挙げられる。がんピアサポートは、生涯学習の一環として社会で取り組むべき学習課題であり、そのことが、今後のがんピアサポートをはじめとしたがん対策を効果的に進めていく上でも鍵となろう。

がんピアサポートの取り組みは始まったばかりであり、その成果や課題が先行研究によって

十分検証されていない点に本研究の課題が残る。したがって可能性も未知数の部分も少なくない。これからのがんピアサポート活動の蓄積により、成果などが明らかになるとともに、その検証が重要となると考えられる。

## 文 献

- 赤尾勝己 (2006) : 生涯学習とは何か—「自己の再帰的プロジェクト」という観点から、現代のエスプリ, 466, 32 - 46.
- がんの統計' 11 (2011) : 累計がん罹患・死亡リスク, 2012 - 08 - 03, <http://ganjoho.jp/data/public/statistics/backnumber/2011/files/fig09.pdf>
- がん政策情報センター第1期プロジェクトスタッフ (2011) : がん対策白書～アドボカシーに使える情報集～, 特定非営利活動法人日本医療政策機構市民医療協議会がん政策情報センター, 18, 東京.
- 久村和穂 (2010) : がん患者が抱える社会生活上の問題と社会的支援の重要性, 現代のエスプリ, 517, 41 - 53.
- Jim, H., Jacobsen, P. (2010) : Finding Benefits in the Cancer Experience : Post-Traumatic Growth (PTG) / Miller, K. : Medical and Psychosocial Care of Cancer Survivor, Sudbury/ 勝俣範之 (2012) : がんサバイバー—医学・心理・社会的アプローチでがん治療を結いなおす, 43, 50 - 51, 医学書院, 東京.
- 加賀美常美代 (2010) : お茶の水大学ピアサポート体制の事例紹介—全額取組と留学生サポートを中心に—, 大学と学生, 561, 22 - 28.
- Knowles, M. S. (1980) : The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy, New Jersey. / 堀薫夫, 三輪健二 (2002) : 成人教育の現代実践—ペタゴジーからアンドラゴジーへ, 9, 19, 38, 40, 鳳書房, 東京.
- 厚生労働省 (2012) : がん対策推進計画, 2012 - 08 - 07, [http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan\\_keikaku02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf)

- 厚生労働省 (2011) : 平成 22 年人口動態調査, 2012 - 8 - 3, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001028897>
- 三輪健二 (2006) : 成人学習論の動向, 現代のエスプリ, 466, 47 - 56.
- 松下年子, 松島英介, 野口海, 他 (2010) : がん患者の心の支えと相談行為の実際—がん患者およびサバイバーを対象としたインターネット調査より—, 総合病院精神医学, 22 (1), 35 - 43.
- 文部科学省 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会 (2012) : 長寿における生涯学習の在り方について～人生 100 年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～, 2012 - 07 - 31, [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112_1.pdf)
- 文部科学省 (1996) : 教育基本法, 2012 - 08 - 17, <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18HO120.html>
- 西山久子 (2009) : ピア・サポートの歴史—仲間支援運動の広がり, 現代のエスプリ, 502, 30 - 39.
- 西山久子, 山本力 (2002) : 実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向—ピアサポート 仲間支援活動の起源から現在まで—, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 2, 81 - 93.
- 大石由起子, 木戸久美子, 林典子 (2007) : ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望, 山口県立大学社会福祉紀要, 13, 107 - 121.
- 大野裕美 (2012) : がんピアサポートのつなぎ機能に着目したピアサポートシステムモデル構築 - A 県を中心とした実態調査からの検討 -, 公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団, 2012 - 08 - 08, [http://www.zaitakuiryo-yuumizaidan.com/data/file/data1\\_20120213040131.pdf?PHPSESSID=c51c1972718147ad4922f4433c533718](http://www.zaitakuiryo-yuumizaidan.com/data/file/data1_20120213040131.pdf?PHPSESSID=c51c1972718147ad4922f4433c533718)
- 大野裕美 (2011a) : がん治療前サポートにピアサポートは有用であるか, 名古屋市立大学院人間文化研究科 人間文化研究, 14, 129 - 141.
- 大野裕美 (2011b) : がんピアサポートの現状と課題を読み解く N 市がん相談情報サロンにおけるフィールドワークから, 臨床看護, 37 (9), 1246 - 1249.
- 大野裕美 (2011c) : がんピアサポートの有用性について, 看護実践の科学, 36 (2), 82 - 85.
- 大野裕美 (2010) : がん相談支援におけるピアサポートの意義—ピアの特徴に焦点を当てて—, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究, 13, 11 - 25.
- 桜井なおみ, 市川和男, 後藤悌, 他 (2008) : ～病と共に歩む人が、自分らしく生きていくために～「がん患者の就労・雇用支援に関する提言」, 2012 - 08 - 02. [http://cancernet.jp/csr/csr\\_honpen.pdf](http://cancernet.jp/csr/csr_honpen.pdf)
- 高山智子 (2010) : がん情報をどう入手したらいいか, 現代のエスプリ, 517, 30 - 40.
- 戸田有一 (2001) : 学校におけるピア・サポート実践の展開と課題—紙上相談とオンライン・ピア・サポート・ネット—, 鳥取大学地域科学部紀要, 2 (2), 59 - 75.
- 土田直子 (2011) : がん体験者相互の関わりがもたらすもの—病院内でのピア・サポートへの期待と危惧—, 淑徳大学大学院総合福祉研究紀要, 18, 185 - 135.
- 山口健 (2003) : がん生存者の社会的適応に関する研究, 2012-08 - 06, <http://www.ncc.go.jp/jp/about/rinri/kaihatsu/mhlw-cancer-grant/2002/focused1120.html>

伊藤奈美・平野文子

# **Viewpoint of Lifelong Learning of the Peer Support with Cancer**

Nami ITO and Fumiko HIRANO

**Key Words and Phrase** : Cancer, Peer Support, Lifelong Learning,  
Experience, Mutuality